

19世紀ポーランドにおける ドイツ人企業家の社会活動 — ウッジ繊維企業家の事例 —

German Entrepreneurs' Social and Cultural Activities in 19th Century Poland

藤井和夫

This paper aims to examine a variety of social and cultural activities by German entrepreneurs in Lodz during the 19th century.

The dynamic development of Lodz in the Polish Kingdom during the 19th century, is due to the expansion of the textile industry. The planned city of Lodz opened to a mass influx of Germans and Jews as factory owners and Poles as factory workers.

The majority of the Polish elite, still cultivated the noble *szlachta* anti-business attitude, and Russian authorities were unconcerned with the modernization of society in the partitioned Poland.

Thus, the social and cultural activities of German entrepreneurs in Lodz, had the historical significance of shaping modern society in 19th century Poland.

Kazuo Fujii

JEL : N74

キーワード : ポーランド、ウッジ、ドイツ人企業家、社会活動、近代化

Keywords : Poland, Lodz, German Entrepreneurs, Social and Cultural Activities, Modernization

1. はじめに

今日ポーランドは、EU 諸国の中で次第にその経済的・政治的存在感が増している。例えばイギリスの *The Economist* 誌はその 2014 年 6 月 28 日号の

ポーランド特集で、現在の同国のことを中世の大国時代のヤギェウォ王朝の名を取って、ポーランドの「第 2 のヤギェウォ時代」と紹介している。第 2 の黄金期を迎えたポーランドというわけである。確かに、停滞するヨーロッパ経済の中で好調なポーランド経済の状況は際立っているが、そのポーランドが、ほぼ純粋な農業国から一応の工業を持つ近代国家に変身を遂げたのは 19 世紀のことであった。他の多くの西欧諸国と同様に、イギリスに始まる産業革命の大波の中で、ポーランドは近代工業国家への歩みを開始したのである。

しかしポーランドは、他のヨーロッパ諸国とは全く異なる特殊な環境の中でその工業化のプロセスを歩むことになった。具体的には 1795 年のロシア・プロイセン・オーストリアによる第 3 次分割の結果、ポーランドはすべての国土を失い、繰り返された激しい民族国家回復の試みも虚しく、第 1 次世界大戦時の 1918 年まで完全な独立を取り戻すことはなかった。近代の国民国家全盛のヨーロッパの中で、「分割による亡国」という悲劇を 123 年にわたって味わったのである。ポーランド経済の近代化は、この「亡国の長い 19 世紀」の間に進行したのであった。

1 世紀以上にわたって独立した国家が存在しない状態の中で、なぜポーランド経済の近代化が可能であったのかについては、既に多くの研究がある。当時の基幹産業である繊維工業については、今日のポーランドの主要な部分がロシア領となってロシアとの一体化を強いられたことが、逆にロシア市場（東方市場）という広大な販売市場が開かれて繊維工業にとってはまたとないチャンスを提供することになったこと、1815～1831 年という短い期間ではあったが、ロシア支配下にながりの自主的な活動を許されたポーランド王国政府が繊維を中心に積極的な工業育成策をとったこと、その政策の結果ウヅジ市に繊維手工業が芽生え、そこに集まり住んだ手工業者や商人が活発な経営活動を展開して、周辺の農村から大量の労働者を吸引しつつ、ウヅジを一大繊維工業地帯に発展させたこと等が明らかになっている。¹⁾ 短命のポーランド王国政府の主体的な政策が、それによって生まれた工業都市ウヅジ市を舞台に、外国から招き

1) 邦語文献の一例としては藤井和夫 [1989]。

入れられた経営者たちを担い手とする国民産業としての繊維工業を発展させ、政治的に無力なポーランドが、逆説的に有利な国際経済環境に恵まれることになったのである。こうした他の国には見られないユニークな条件の中での工業化は、19 世紀のポーランド経済に、単にその後発性だけでは説明のつかない独特の性格を与えることになった。

ところで西欧諸国は、同じ時期に工業化のプロセスと並行して、その要因ともなり、結果ともなりながら、社会の近代化を推し進めていく。国民国家としての諸制度の確立、政治や行政機構の民主化、都市化の進展と都市生活の近代化、社会階層・職業の流動化、福祉制度や教育の近代化等、社会全体の近代化が 19 世紀を通して進んでいった。ポーランドの場合は、このような社会の近代化はどのように進んだのであろうか。明らかに分割支配下にあったポーランドには、国民国家としての求心力の強化や政治・行政組織の近代化は望めなかった。それ以外の社会の近代化にも、亡国下の工業化にともなう特殊性は特別な要素を加えたのであろうか。本稿では、その問題について、19 世紀のポーランド社会の近代化に工業化の担い手が果たした役割を中心に検討する。ここでは特に第 1 次大戦以前の繊維工業の中心地であったウヅジ市におけるドイツ人企業家の社会的活動に注目してみたい。まず、なぜドイツ人企業家の活動に焦点が当てられるのかについて説明しなければならない。

2. 19 世紀におけるウヅジ市の発展とその民族的構成

筆者はかつて、ウヅジ市の発展はドイツ人とユダヤ人とポーランド人ともどもに主要な人的構成要素としながら進んだものであり、総人口が短期間のうちに急速に増加したこと、相対的にポーランド人の数が少なく、19 世紀末におけるウヅジ市の人口のうち半分以上がポーランド人以外で、ポーランドの他の都市同様に 19 世紀末にユダヤ人の数が市の人口の 30% 近くを占めるようになり、ドイツ人の数がポーランドの他の地域に比べて非常に多いということがウヅジ市の人口の大きな特色となっていたことを指摘した。²⁾

2) 藤井和夫 [2002] 4 頁。

第 1 表 19 世紀のウヅ市の人口と民族構成 (単位：千人 () 内は%)

年	人口	ポーランド人	ドイツ人	ユダヤ人
1820	0.8	0.5 (66)	- (-)	0.3 (34)
1831	4.7	0.8 (17)	3.5 (74)	0.4 (9)
1838	5.0	2.3 (46)	2.2 (44)	0.5 (10)
1840	10.6	4.6 (44)	5.0 (47)	1.0 (9)
1858	24.6	11.6 (47)	10.1 (41)	2.9 (12)
1863	33.4	7.1 (21)	20.7 (62)	5.6 (17)
1865	32.4	12.7 (39)	12.8 (40)	6.9 (21)
1894	168.5	69.1 (41)	57.3 (34)	42.1 (25)
1913	506.0	252.0 (50)	75.0 (15)	172.0 (34)

出所：拙稿「19 世紀後半ポーランドのインフラ整備と企業家ウヅ市における市電開設を中心に」
『関西学院大学 経済学論究』58 巻 3 号、2004 年 12 月、619 頁。もとは T.Olszewski,
Łódź w Polsce i w świecie, w W.Michowicz red. [1979] s.19

同市の総人口の増加と民族的人口比率の変化は第 1 表のとおりである。1820 年に人口 800 人程度であったウヅ市は、半世紀後には 30 万人都市となり、さらに第 1 次大戦直前にはポーランドで 2 番目の 50 万人以上の人口を持つ大都市に急成長している。しかもその民族別の人口構成に注目してみれば、ポーランドの社会にあつて異様なほどドイツ人の割合が多い。

第 1 表では、19 世紀半ばまでドイツ人が半数かそれ以上住んでおり、同世紀末に至ってようやくポーランド人の市人口に占める割合が増えている。かなりの期間にわたってポーランド人はむしろ少数派で、ウヅ市はまさにドイツ人の町という印象を与えるが、そこには注意を要する問題がある。実はポーランドの人口統計において正確な民族別の人口を知るのはかなり困難なのである。³⁾ 第 1 表のように異なる年度のデータを比較する場合、各年の住人のカテゴリーの基準とデータ把握の範囲は必ずしも安定的ではなく、民族別人口の数字そのものやその時間的変化の理解には一定の留保が必要となる。その事情は第 1 次大戦以降でも変わらなかった。⁴⁾ さらに、ウヅ市が「例を見ないほど

3) Wiesław Puś, Zmiany liczebności i struktury narodowościowej ludności Łodzi do roku 1939, w Marek Koter et.al [2005], s.20-30.

4) ジョセフ・ロスチャイルド、大津留厚 監訳 [1994] 35-45 頁。

ダイナミックな町で、その住人の多民族性が大きな特徴であり、……ユダヤ人がたちまちドイツ化し、一方ドイツ人がポーランド化して、ポーランド人よりもカトリック教徒の数が多く、プロテスタントの数よりもドイツ人が少ない」⁵⁾と評される民族間の流動性という、同市の特性も考慮しなければならない。その上で、やはりポーランド社会の中でウヅジ市は、ドイツ人人口の多さでは特別な町であったと言えるであろう。

第 2 表からは、ウヅジ市ではカトリックの割合は 19 世紀初頭から 5 割程度で、それが世紀末にかけて 4 割程度まで減少した後 20 世紀に入って再び 5 割程度に回復しており、当初 3 割強であったプロテスタントが 19 世紀半ばに 4 割を超えるまで増加し、その後世紀末にかけてゆっくり減少し、代わって当初は 1 割程度であったユダヤ教の人口が 3 割を超えるまで着実に増えたことがわかる。先に述べたように宗教と民族との対応関係にはややずれがあることを踏

第 2 表 ウヅジ市の宗教別人口比率の推移 (1828-1914 年)

年	総人口		カトリック		プロテスタント		ユダヤ	
	千人	千人	千人	%	千人	%	千人	%
1828	4.4	2.5	56.8	1.4	31.8	0.5	11.4	
1846	14.4	7.2	51.0	5.4	38.3	1.5	10.6	
1850	15.6	6.8	43.6	6.8	43.6	2.0	12.8	
1855	24.6	11.5	46.7	10.3	41.9	2.8	11.4	
1864	33.5	13.1	39.1	13.9	41.5	6.5	19.4	
1875	49.4	19.4	39.3	17.1	34.6	12.9	26.1	
1885	106.3	40.7	38.3	40.7	38.3	24.9	23.4	
1890	129.5	49.3	38.1	48.6	37.5	31.6	24.4	
1895	166.0	70.8	42.6	52.2	31.4	43.0	25.9	
1900	280.0	140.3	50.1	70.9	25.3	68.8	24.6	
1905	336.7	164.6	48.9	88.4	26.2	83.7	24.9	
1914	481.2	252.9	52.5	64.5	13.5	163.8	34.0	

出所：Wiesław Puś, Zmiany liczebności i struktury narodowościowej ludności Łodzi do roku 1939, w Marek Koter et.al [2005], s.20

5) Marek Budziarek [2000], s.5.

まあ上で、近似的に、カトリックをポーランド人、プロテスタントをドイツ人と考えると（ユダヤ教はユダヤ人）、19 世紀末までのウッジ市の他に類を見ない人口増加の中でドイツ人の占める割合が大きかったことは明白であろう。

さらに、ウッジ市の発展が繊維工業の発展を中核とするものであることを考えれば、その繊維工業の担い手の構成はウッジ市におけるドイツ人の重要性をいっそう際立たせるものとなる。第 3 表は雇用数 5 人以上の繊維企業の経営者数であるが、1866 年の経営者のうちポーランド人が 13.0%なのに対してドイツ人は 48.3%（ユダヤ人 19.9%）を占め、1870 - 1880 年ではポーランド人 10.8%に対してドイツ人 45.8%（ユダヤ人 32.3%）、また 1890 - 1900 年にはポーランド人 10.5%に対してドイツ人 37.2%（ユダヤ人 43.7%）となっている。企業家層に関しては、ドイツ人とユダヤ人がそのほとんどを占めていたのである。

しかも表にはないが、1866 年の 100 人を超える雇用数の企業はドイツ人の経営する 1 企業だけであったし、1870 - 1880 年の 500 人を超える雇用の大企業 5 社のうちドイツ人経営が 3 社、ユダヤ人経営が 1 社、その他 1 社となっており、1890 - 1900 年の同じく同じく 500 人を超える雇用の大企業 14 社のうちドイツ人経営が 6 社、ユダヤ人経営が 4 社、その他 2 社、不明が 2 社となっている。100 人以上雇用規模の企業を見ても（500 人以上の規模は除く）、

第 3 表 ウッジ市繊維企業家の民族構成

	1866 年	1870 - 1880 年	1890 - 1900 年
	人 (%)	人 (%)	人 (%)
ポーランド人	49 (13.0)	43 (10.8)	66 (10.5)
ドイツ人	182 (48.3)	183 (45.8)	233 (37.2)
ユダヤ人	75 (19.9)	129 (32.3)	274 (43.7)
チェコ人	56 (14.9)	-	-
他	15 (4.0)	13 (3.3)	27 (4.3)
不明	-	32 (8.0)	27 (4.3)
計	377 (100)	400 (100)	627 (100)

出所：藤井和夫 [1989] 141-142 頁

1870 - 1880 年は、ドイツ人経営 10 社、ユダヤ人経営 6 社、不明 4 社の計 20 社であり、1890 - 1900 年は、ドイツ人経営 26 社、ユダヤ人経営 15 社、その他 4 社、不明 20 社、そして初めてポーランド人経営の 2 社が加わって計 67 社であった。⁶⁾

このように、単に市の人口増加の中で大きな割合を占めただけではなく、19 世紀のポーランドの工業化の中核をなす繊維工業の発展においてドイツ人企業家はきわめて重要な位置を占めていたのである。それでは、当時のポーランド社会の近代化に関しては、ドイツ人企業家はどんな役割を果たしたのだろうか。

3. 19 世紀のポーランド社会とウッジのドイツ人企業家

19 世紀のポーランドは、分割による「亡国」という事実が突きつけた強烈な政治的・経済的危機意識のもとで工業化に取り組むことになった。その成果が政策的に建設されたウッジ市の発展であり、その繊維工業の成長であった。そしてその発展の主たる担い手となったのが、ドイツから移住してきた手工業者たちだったのである。では彼らの持ち込んだどのような要素と資産が、ウッジの経済社会の形成と発展の屋台骨となったのであろうか。

まず注意しなければならないのは、ポーランドに移り住んできたときのドイツ人手工業者の経済状態である。彼らはその祖国においてイギリスやドイツ国内の機械化の進む近代的繊維工場との激しい競争によって生活基盤を奪われつつあった手工業者であって、ポーランドという繊維業の後進地域への移住がその熟練技術の相対的価値を高め、ポーランド王国政府の援助がその財政的危機を救い、ポーランドやロシアの潜在的な市場の存在が自らの職業の将来展望を可能にするという事情のもとにあった。⁷⁾「入植者たちはチェコ、ザクセン、ラインラントおよび他のドイツ諸国からやってきた。毛織物工たちは Nowe Miasto (1821~23 年に政府によって整備された織物工入植地—筆者) に住み着き、政府から菜園と無料の建材を与えられた。後には彼らのうちの何人かは政府資金で建築された家屋を与えられた。彼らは道具や家財、そしてわずかば

6) 藤井和夫 [1989] 141 - 142 頁。

7) 藤井和夫 [2002] 6 頁。

かりの原材料を携えていたが、この最初の人たちは非常に困窮していた。初期の織物工たちには自己資本がなかったのも、原材料を自弁するのはひどく困難であり、(生産に関して政府と一筆者) 結んだ契約を履行することも難しかった。やがて特別に作られた政府基金の援助が得られ、1823 年からは工業資金の貸し出しが始まった。数年間の間にやや財産のある経営者がその財産を担保に 5% の信用貸付を手に入れた。……1829 年からは Bank Polski (国立銀行一筆者) の貸付金もまた利用された。」⁸⁾ すなわち彼らは、ポーランド政府からの援助とウッジという受け皿がなければ、織物の手工業者であり続けることすらままならない人々だったのである。

ところが、ポーランド王国政府からチャンスを与えられ、彼ら自身の決断によって新天地ウッジにやってきたとしても、彼らの新生活のスタートは必ずしも順調というわけにはいかなかった。ポーランド王国政府にもくろまれた毛織物と続く麻織物のウッジへの定着はすぐにはうまくいかなかった。「ウッジでそのキャリアを開始した工場主たちのすべてが成功を取めたわけではない。特にパイオニアたちについていえば、その役割は常に最も困難なものであった。」⁹⁾ 移住してきた人々の生活をかけた、そして当時の県知事 Rembielinski や市長 Tangermann たちの必死の努力と試行錯誤を経て、ウッジに綿業が定着し始めることによってようやくすべての試みの成果が現れ始める。「結果として綿業がウッジの女王となり、綿業のおかげでウッジは『約束の土地』となった。……(しかし最初の成功者はごく限られており一筆者) 他の者は長らく成功を待たねばならなかった。ようやくその子孫たちによって、彼らの父親たちがウッジに移住しようと決心したときに夢見ていたような企業が創設されたのである。彼らははじめは他人の工場で働きながら、やがて未来の工場経営の成功を夢見つつ独立していった。財産を作り上げるには、何年もの彼ら自身の努力と何千もの雇用労働者の労働が必要であった。これらの群れをなす多くの人々のおかげでウッジは日々成長し裕福になっていったのである。」¹⁰⁾

8) Marek Budziarek et.al [2000] s.21.

9) Leszek Skrzydło, Rody fabrykanckie, w Marek Budziarek et.al [2000] s.85.

10) Marek Szukalak, Miasto lodzermenschów, w Marek Budziarek et.al [2000] s.23.

本稿は、ポーランド社会の近代化の中でドイツ人企業家の存在や彼らが行った社会的活動がどのような意味を持ったのかを検討することが課題であって、彼らの企業活動そのものを分析しようとするものではないが、ここで彼らの企業家としてのスタートが、短命のポーランド王国政府による（たとえ限定されたものであったとしても）ポーランドの工業化を目指した政策と、ウッジという地域社会の成り立ちと展開とに深く結びついていたこと、さらにその企業家としての成功には、ウッジへの定着と家族数代にわたるウッジでの時の経過が必要であったことを確認しておくことは重要である。ウッジに住むドイツ人企業家の活動のすべては、ポーランド社会の近代化にとって内的要因であって、決して外的要因ではなかったのである。

綿工業の分野でウッジで最初に成功した人物はドイツ人のルドウヴィク・ガイエル Ludwik Geyer であった。1805年ベルリン生まれのガイエルは、ポーランド王国政府の派遣したエージェントの仲立ちによって、1828年にザクセンのノイゲルスドルフからウッジに移住してきた。彼は翌1829年に小規模の綿布の捺染場を設立することからウッジでの事業を開始し、1833年には大規模な水力ローラー捺染機をウィーンから導入している。そして1837年（別の史料では1839年）にはベルギーから蒸気機関を購入し、1840年から機械化された綿紡績工場と織物工場の操業を開始した。彼の購入した蒸気機関はウッジで最初の蒸気機関であり、彼の工場の煙突がウッジで最初の工業用煙突となった。それはまさに、のちに町中に煙突の林立することになる工業都市ウッジの新時代を象徴するものであった。彼はウッジにおける綿業の草分け的存在であり、近代的な機械を導入してその経営を拡大させることで、ウッジの繊維業をマニュファクチュア段階から工場制工業に引き揚げた正真正銘のパイオニアだったのである。¹¹⁾

ガイエルの事業の成功に関しては、彼の事業家としての有能さがしばしば指摘される。Skrzydło は次のように言っている。「ガイエルは、ウッジの工業

11) Skrzydło, Leszek [1999]s.25-28, Marek Szukalak, Miasto lodzermenschów, w Marek Budziarek et.al [2000] s.25-27, Leszek Skrzydło, Rody fabrykanckie, w Marek Budziarek et.al [2000] s.85-87, 藤井和夫 [1989] 149-150 頁。

のパイオニアである手工業者たちの中で、その知識と熟練において卓越していた。彼は綿密にヨーロッパ各国の新技术を観察し、博識であった。」さらに「彼が自分の財産を豊かに殖やしたのは、単に綿製品の好景気によるものだけではなかった。それは彼自身の個人的な資質、すなわち勤勉さ、人一倍エネルギーシユであったこと、そして慎ましい生活様式のおかげであった。」そしてガイエルの知識と事業への情熱について続けて言う。「彼はウッジに移住する際には 70 冊以上の専門書を持参し、……のちに染色用植物の栽培について論文を書いている。」また彼はピオトゥルコフスカ通りに面した入植地に住み着いたあと、「家の周辺に広い果樹園と野菜畑を所有した。さらに市外にも土地を購入して、砂糖製造所、製材所、煉瓦製造所、アルコール蒸留所そして魚養殖用の池まで所有していた。」¹²⁾ 従事する産業分野における熟練に加えて、関連する新しい技術の知識とそれが持つ可能性を見通す能力を持ち、勤勉さと急速な資本蓄積を可能にする儉約精神の持ち主であり、かつ事業熱にあふれた人物。これはまさに、19 世紀の資本主義に求められた企業家資質というべきものであり、工業の発展をめざすポーランドが求めていたものを、見事なまでにガイエルは持ち合わせていたことになる。

ポーランドが工業化し、その社会が近代化するためには、このような資質を持った人々がある層をなして出現してくることが不可欠であった。しかしながら伝統的なポーランド社会は、そのような人々を自らの内部から豊かに生み出すには向いていなかった。I.T. Berend は、当時から「ポーランドのマンチェスター」と呼ばれていた繊維工業の中心地ウッジは、ほとんど「ポーランドの」町ではなかったと言い、その理由に先に示したポーランド人が少ないその人口構成を挙げて、さらに続いて次のように書いている。「大多数のポーランド人エリートたちは、昔ながらのポーランド貴族シュラフタの反ビジネス的態度を保持しており、いまだにビジネスはユダヤ人のためのものであってポーランド人のものではないと考え、このウッジの町を憎んでいた。有名なカトリックのジャーナリスト Zygmunt Bartkiewicz は、ウッジを異教徒の社会、悪徳の文

12) Skrzydło, Leszek [1999] s.26-27.

化が支配する『悪の町』と呼んだ。同じような記述はポーランドのノーベル賞作家 Wladyslaw Reymont にも見られ、彼の 1899 年の有名な小説『約束の土地』の中では Lodzermenschen（すなわちウッジに居住するドイツ人一筆者）のことを、無慈悲で、墮落した、搾取的な異教徒たちと表現している。」¹³⁾

確かに、ポーランド社会の中で、その民族的な伝統を支え、社会生活の倫理的規範と文化的態度に大きな影響力を持ち続ける貴族シュラフタ的な気質は、ヨーロッパで近代経済社会を切り開いた合理的で進取の気概に満ちた企業家精神とは、どこか相容れない要素を持っていた。ウッジの企業家集団の中にこれほどまでにポーランド人が少ないのは、彼らが無自覚、無能力だったからでも、彼らに資力が欠けていたからでもなくて、むしろポーランド人の中の企業家となり得る可能性をもつ人々の精神的志向のゆえとも考えられるのである。であればこそ、ガイエルに見られるようなウッジに移住したドイツ人の一部が持っていた企業家的資質は、近代ポーランド経済社会にとって不可欠な要素となるものであった。彼らはウッジによって企業家となる可能性を与えられ、ウッジは彼らによって近代経済社会に変身する可能性を与えられたのである。

4. ウッジにおけるドイツ人企業家による社会的・文化的活動

経営に成功したルドウヴィク・ガイエルはウッジ市において著名な人物となり、市民代表のような立場に置かれることになった。そのため、市における様々な社会事業に関わることになる。例えば 1840 年代にウッジで最初の病院である聖アレクサンデル病院の建設が始まると、その建設資金のかなりの部分を負担して計画を支えるとともに、設立後は病院の設備や運営を担う委員会の長を務めた。馬や馬車に夢中になって競馬レース協会の一員となったのはともかく、文化活動にも関係して、たとえばドイツ歌曲普及協会を組織し、ウッジで最初のコーラス・グループであるウッジ男声合唱団を創設し、1851 年には自身の工場労働者の子どもたちのための学校を設立した。市のインフラ整備に関しては、鉄道のワルシャワ－ウィーン線からウッジ市に引き込み線を建設す

13) Berend, Ivan T. [2013] p.194.

る計画を提案したが、これはすぐには実現せず、後にシャイプラーたちの協力を得て実現している。¹⁴⁾ 企業家として有能であったガイエルは、ビジネスとは異なった社会活動や文化活動の分野においても、ウッジを代表する企業家としてその社会の発展に大きな役割を担っていたのである。

1869 年のルドウヴィクの死後、企業は息子たちに引き継がれ（1894 年まではグスタフ・アドルフ、その後は弟のエミール）、1850 年代半ばから Bank Polski 等への債務に苦しんでいた企業を立て直すとともに、社会事業への取り組みも彼らに受け継がれていった。とくに 1870 年にヴロツワフの高等技術学校 Wyższa Szkoła Techniczna を卒業したエミールは、ウッジにおける民間の主要銀行となる商業銀行 Bank Kupiecki の創設を指導し、その監査役会 rada nadzorcza の議長を務めたほか、ガイエル家が財政援助を借しなかつたウッジの職人学校 Szkoła Rzemiosł の運営委員会議長を務め、またウッジにポーランドで最初の市電を走らせた共同運営組織 Towarzystwo Kolei Elektrycznej の一員となり、1902 年にウッジ郊外に設立された神経科病院や 1905 年に設立された子どものための病院にも巨額の援助を行った。さらにポーランド演劇協会がウッジに設立されるとその運営委員会の長となり、自分自身や他の企業家のコレクションによって絵画の展覧会を開催した。¹⁵⁾ ガイエルの綿工場は時の経済状況の影響や自身の債務過多によって経営状況が変動しつつも、第 2 次大戦時までウッジの代表的な企業であり続けたが、その経営者および家族の社会的・文化的活動も、ウッジの社会の中で常に重要な役割を担い続けたのである。

1910 年のエミールの死後企業はその弟エウゲニウシュ、そして 1929 年からはグスタフ・アドルフの息子、すなわちルドヴィクの孫のグスタフ・ヴィルヘルムに引き継がれていくが、その弟のロベルトは第 2 次大戦開始直後の 1939 年 12 月に、ウッジを占領するナチスのゲシュタポによって自宅で射殺されている。理由は彼が、ドイツ系のウッジ市民に要求された「ドイツ人リスト」への署名を拒んだためと言われ、ウッジに住んで三代目に至ったガイエル

14) Skrzydło, Leszek [1999] s.27.

15) Skrzydło, Leszek [1999] s.28-30.

一族がいかにポーランド化していたかを示すエピソードに他ならない。¹⁶⁾

以上に見られるようなガイエル一族のウッジにおける社会・文化事業は、ウッジのドイツ人企業家の中で決して例外的な事例ではなかった。企業家たちは工場経営にその能力を発揮して、新しい技術を積極的に導入し、綿工業、後には復活した羊毛工業や麻工業を発展させ、市内に工場を建て、後に一般的に見られるようになる工場周辺の労働者住宅を建て、病院や学校や教会を建て、道路を改修し、鉄道や市電を建設し、Ludwik Meyer のようにガス灯の導入もその私邸と私道から開始した。「彼らは町中の景色に痕跡を残しただけでなく、ウッジ住人のかかなりの部分のメンタリティにもその痕跡を残したのであった。」¹⁷⁾

ではなぜ多くのドイツ人企業家が社会・文化事業に関わったのであろうか。その一つの理由は、近代にふさわしい社会環境を整える責任を担うはずの行政当局が、近隣三国による分割支配の下にあるポーランドでは、事実上機能していなかったからであった。「工業都市ウッジはあつという間に生まれ、そこですばやく巨大な富を築いた。しかし大富豪の陰には、大衆的規模で貧困が広がっていた。ロシアの行政当局は貧乏人の運命には全く配慮せず、また文化や教育のような事業には全く無関心であった。」¹⁸⁾ ウッジには 1861 年にロシア皇帝の勅令によって市評議会 Rada Miejska が作られ、市長の Franciszek Traeger が最初の議長を務め、評議会員の中にはルドウヴィク・ガイエルやルドウヴィク・グローマン等の工業家やユダヤ人商人ヘルマン・コンシュタットが加わっていて、土地の処理や役人任命権等を持っていたが、すべて上位のロシア統治当局の承認が必要でその活動には限界があった。その市評議会すら 1863 年の 1 月蜂起後に構成メンバーを変更され、1869 年には市評議会そのものが解散させられている。¹⁹⁾ ウッジの繁栄とポーランド社会の近代化に敵意を持つロシア当局が、西欧諸国に見られたような近代の都市社会が期待する行政を行うことは望み得なかったのである。一方で現実の社会には解決すべき課題が山ほ

16) Skrzydło, Leszek [1999] s.30-33.

17) Budziarek, Marek [2000] s.6.

18) Leszek Skrzydło, Rody fabrykanckie, w Marek Budziarek et.al [2000] s.149.

19) Marek Szukalak, Miasto lodzermenschów, w Marek Budziarek et.al [2000] s.29-35.

どあり、「彼ら（ドイツ人工業家たち一筆者）を取り巻く生活環境、すなわち住民の大部分の貧困、病気と疫病、とくに工場で頻発した事故は、彼らに例外的な社会活動領域に乗り出すことを余儀なくさせた。慈善は、一部には旧約聖書や新約聖書にその根拠を持っていて、それらの活動に宗教的な意味もまたあったとしても、むしろ工業発展の自然の結果であった。」²⁰⁾

そのような背景の中で、ポーランドにおいては 1860 年代頃から地主とインテリに並んで企業家の社会的、文化的活動が重要な役割を果たすようになってきた。それは個人活動の形をとることもあれば、多様な慈善的組織の形での社会活動、たとえば 1877～1885 年のウッジ・キリスト教慈善協会 *Lódzkie Chrześcijańskie Towarzystwo Dobroczynności* といった団体としてのものもあった。そのような活動に熱心に関わったドイツ人企業家には、ガイエルの他に、シャイプラー、ヘルプスト、ハインツェル、ジルベルシュタイン等がいる。²¹⁾

1870 年代以降のドイツ人工業家たちによる社会活動の核のひとつは教育であった。とくに職業学校の発展に対する彼らの関心が、多様な技術学校や商業学校の開設につながった。ウッジにはユダヤ人企業家による学校の数も多かったが、1899 年設立の手工業・工業学校 *Szkoła Rękodzielniczo-Przemysłowa* は、先に述べたウッジ・キリスト教慈善協会の下の子職人学校 *Szkoła Rzemiosł* 同様にガイエル家の財政的援助を受け、同家はウッジの最初の工業学校である同校に 9 万ルーブルの寄付をしていた。一方で小学校の発展に関しては、企業家が自主的に設立した工場隣接の学校が重要な役割を果たした。ウッジには 1876 年以降に設立されたそのような学校が 1914 年に 23 校あり、そのうちの 3 校がシャイプラーの工場付設学校であった。学校以外にも、大きな工場のそばには膨大な蔵書からなる図書館が作られ（例えば 1885 年のシャイプラーの工場）、それが地域の識字能力の発展にある程度役立ったし、読書によって知識を普及したウッジの教育協会「知識」*Towarzystwo Oświatowe “Wiedza”*

20) Budziarek, Marek [2000] s.6.

21) Stefan Pytlas, *Spoleczna i kulturalna aktywność burżuazji Królestwa Polskiego*, w Stefan Meller, red. [1989] s.259.

の設立（1908年）に際しても、ドイツ人企業家の代表が加わっていた。²²⁾

ドイツ人企業家たちが熱心であったもう一つの分野は、医療部門であった。シャイプラーやハインツェル＝クニツェルの工場には併置された総合病院があり、専門病院としては1902年設立の前述の精神科病院“Kochanówka”や1905年設立のAnna Marjia小児科病院があり、前者にはガイエル家が3万ルーブル以上を提供し、後者にはヘルプストHerbst家が20万ルーブル以上を寄付している。その他ドイツ人企業家たちによって、産婦人科施設、工場付設の託児所、老人ホームや障害者施設、それに慈善協会もしくは個人の援助を受けた様々な施設が設立・維持されたのである。²³⁾

さらにドイツ人企業家たちは様々な芸術活動に対しても支援している。美術愛好協会の設立（1862年）や個人による美術品のコレクションと展示の他、1910－1911年の科学美術博物館Muzeum Nauki i Sztukiの設立に際しては、シュルツSchlitz家やアイゼルトEisert家はその建設と維持に協力している。またウッジ音楽協会の50人編成のオーケストラは1900－1905年にグローマン家から財政支援を受けていたし、大企業の中には自分のオーケストラを持つところもあり（シャイプラーは1897年、ハインツェル＝クニツェルは1899年設立）、しばしばかなり高い芸術的水準に達していて、シャイプラーとクニツェルの企業のオーケストラは1901年10月6日にロシア皇帝ニコライ2世が来訪した折りに御前で演奏している。演劇の分野では前述のウッジ・ポーランド演劇協会（1903年設立）にガイエル家が援助を与えていた。²⁴⁾

以上挙げた以外にも、1884-1892年に発行されていた『ウッジ新聞』“Dziennik Łódzki”にヘルプスト家が資金援助をしていたり、サイクリング（ハインツェルHeinzel家）、テニス（ビーデルマンBiedermann家）、スケート、ボート等様々なスポーツ種目の普及にもドイツ人企業家は貢献していた。これらのス

22) Stefan Pytlas, Społeczna i kulturalna aktywność burżuazji Królestwa Polskiego, w Stefan Meller, red. [1989] s.260-261.

23) Stefan Pytlas, Społeczna i kulturalna aktywność burżuazji Królestwa Polskiego, w Stefan Meller, red. [1989] s.262.

24) Stefan Pytlas, Społeczna i kulturalna aktywność burżuazji Królestwa Polskiego, w Stefan Meller, red. [1989] s.263.

ポーツのクラブは当初はエリート的な性格を持つてはいたが、後にはより広い層の人々の活動につながるものであった。²⁵⁾

以上ドイツ人企業家たちによって様々な社会・文化活動が展開されたことを見てきた。それがウッジの社会の発展と近代化にどう関わり、どの程度貢献したかについては、まだ分析すべき課題も多い。しかし、少なくとも彼らが行った諸活動が公的な生活の多くの分野を含んだものであり、彼らの資金提供や組織化のイニシアティブと努力、そして今日までも残る様々な施設や組織を考えれば、ウッジの文化、教育、社会活動の永続的な基礎となって実を結んだものと考えることができるであろう。

5. おわりに

ドイツ人企業家たちは、ウッジに定着して事業を展開し、自らの夢を実現すると同時に、ポーランド近代経済社会の担い手となったのであるが、「自分たちの伝統を持ち、自身が勤勉であることを自覚して、自分たちの町を作った」のは、もちろんドイツ人ばかりではなかった。²⁶⁾ ウッジ市を作り上げたポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人がそれぞれどのような相互関係を作りだしたかについてはすでに考察したところであるが²⁷⁾、重要なことは、彼らは、ウッジ市にこそビジネスチャンスがあるという共通の前提条件を持ち、ウッジを第二の故郷として、自分たちをドイツ人、ユダヤ人という以上に「ウッジ人」と表現するような人々であったことである。さらにそこには、その多くが周辺農村からやってきた工場労働者であったポーランド人も含めることができる。

そもそも「すべての時期を通してここ（ウッジ市－筆者）には隣人としてポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人、オーストリア人、チェコ人、フランス人

25) Stefan Pytlas, *Spoleczna i kulturalna aktywność burżuazji Królestwa Polskiego*, w Stefan Meller, red. [1989] s.264.

26) Budziarek はウッジを代表する人々として、ポーランド人、ドイツ人、ユダヤ人の神父や牧師、行政官や官吏、工場主や商人、社会活動家、ジャーナリスト、芸術家等多様な人々の例を挙げて、「今日のウッジは、彼ら共同の産物である」と述べている。Budziarek, Marek [2000] s.5.

27) 拙稿「19世紀の工業都市ウッジにおける民族的共生－多民族社会ポーランドの側面－」、『関西学院大学 人権研究』、第2号、2002年3月。

が生活していた。これこそが多民族で、多宗教で、そして何よりも適度に寛容であったポーランド的な『約束の土地』のウッジであった。」²⁸⁾ 従って本稿のタイトルを「ドイツ人企業家の……」とすることは、19世紀のポーランド、とりわけてウッジの社会の近代化を主題とする以上、本当はあまりふさわしくない。むしろ「ウッジ人企業家の……」とすべきであろう。もちろん、ウッジに民族的な対立や差別がなかったわけではなく、自分たちを「ウッジ人」と呼ぶドイツ人やユダヤ人を、工場労働者であったポーランド人がどんな目で見ているかは、人により、また時と場合によって様々であった。それについては、また改めて考えてみたいが、西欧諸国とは全く異なった政治状況に置かれていた19世紀のポーランドの近代社会の形成と発展という問題を考えるときに、本稿で示したウッジのドイツ人企業家が果たした役割については、十分に評価すべきことだけは強調しておきたい。

筆者はかつて、ウッジの企業家には「理想化された企業家」と「汚い企業家」の二つの企業家像があり、それを、もしも条件が整いそのように振る舞うことを許されたならば彼らが企業家としてそういう行動をとろうとしたであろうイメージと、現実の厳しい経済・経営環境の下で彼らが実際にそのように行動せざるを得なかった企業家のイメージであると考え、ウッジ移住の後発組のシャイプラーやガイエルをはじめとする初期の企業家の2代目以降を前者、ルドウヴィク・ガイエルを典型的な後者と見なした。²⁹⁾ 経営活動の多面性を含めて企業家を評価すべきであると主張したつもりであったが、本稿で示したような彼らの社会的・文化的活動の評価が不十分であったと今は考えている。

第2次大戦後社会主義国となったポーランドでは、ウッジの繊維工場はことごとく国有化されることになり、新しい企業の名称からはその創業者の名前が消されていった。同時に、19世紀のウッジの発展におけるドイツ人企業家の貢献も公にはあえて無視され、彼らの名前も活動も人々の記憶から消えていったのである。しかし再び政治体制の転換したのちの1990年代から21世

28) Marek Budziarek et.al [2000] s.151.

29) 拙稿、「19世紀ポーランドの企業家をめぐって－19世紀前半におけるウッジ繊維企業家の評価を中心に－」、中山昭吉・松川克彦編 [2000] 204-216頁。

紀の初めにかけて、改めて 19 世紀のウッジのドイツ人やユダヤ人企業家たちの存在とその地域社会の発展における貢献が見直されつつある。本稿で検討したウッジに定着してウッジ人となったドイツ人企業家たちの「19 世紀ポーランドの企業家」としての存在も、近代ポーランド社会の形成と発展に貢献した彼らによる社会的・文化的諸活動も、今日のウッジでは広く知られ、その重要性を認められるところとなっている。

参考文献

- Berend, Ivan T. [2013] *Case Studies on Modern European Economy – Entrepreneurs, Inventions, Institutions*, London(Routledge)
- Budziarek, Marek [2000] *Lodzianie*, Literatura, Łódź
- Budziarek, Marek, Skrzydło, Leszek, Szukalak, Marek [2000] *Łódź nasze miasto*, Łódź
- Kołodziejczyk, Ryszard red. [1993] *Image przedsiębiorcy gospodarczego w Polsce w XIX i XX wieku*, Warszawa
- Koter, Marek, Kulesza, Mariusz, Puś, Wiesław, Pytlas, Stefan [2005] *Wpływ wielonarodowego dziedzictwa kulturowego Łodzi na współczesne oblicze miasta*, Łódź
- Meller, Stefan, red. [1989] *Pamiętnik XIV Powszechnego Zjazdu Historyków Polskich*, Toruń
- Michowicz, W. red. [1979] *Wczoraj, dziś i jutro Łodzi*, Łódź
- Puś, Wiesław red. [2004] *Studia z historii społeczno-gospodarczej XIX i XX wieku*, Tom II, Łódź
- Skrzydło, Leszek [1999] *Rody fabrykanckie*, Łódź
- ジョセフ・ロスチャイルド、大津留 厚 監訳 [1994] 『大戦間期の東欧－民族国家の幻影－』、刀水書房
- 中山昭吉・松川克彦編 [2000] 『ヨーロッパ史研究の新地平－ポーランドからのまなざし』、昭和堂
- 藤井和夫 [1989] 『ポーランド近代経済史－ポーランド王国における繊維工業の発展 (1815-1914 年)－』、日本評論社
- 藤井和夫 [2002] 「19 世紀の工業都市ウッジにおける民族的共生－多民族社会ポーランドの側面－」、『関西学院大学 人権研究』、第 2 号、2002 年 3 月